

# 六本木未来会議

デザインとアートと人をつなぐ街に

塩田千春 アーティスト

Chiharu Shiota / Artist



## CREATOR<sup>No</sup> INTERVIEW 107

塩田千春 Chiharu Shiota

1972年、大阪府生まれ。ベルリン在住。生と死という人間の根源的な問題に向き合い、「生きることは何か」、「存在とは何か」を探求しつつ、その場所やものに宿る記憶といった不在の中の存在感を糸で紡ぐ大規模なインスタレーションを中心に、立体、写真、映像など多様な手法を用いた作品を制作。2008年、芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞。2015年には、第56回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展日本館代表。森美術館（2019年）、南オーストラリア美術館（2018年）、ヨークシャー彫刻公園（2018年）、高知県立美術館（2013年）、丸亀市猪熊弦一郎現代美術館（2012年）、国立国際美術館（大阪、2008年）を含む世界各地の個展のほか、シドニー・ビエンナーレ（2016年）、キエフ国際現代美術ビエンナーレ（2012年）、横浜トリエンナーレ（2001年）などの国際展にも多数参加。

# No 107 塩田千春 アーティスト

CHI HARU SHIOTA / Artist

クリエイターインタビュー

『国籍も性別も問わず、わかりあえるところ』



日本と世界をつなぎ、境界線のない自由な世界へ。

published\_2019.07.31 / photo\_yoshikuni nakagawa / text\_akiko miyaura

現在、森美術館で、25年間のアーティスト活動の軌跡を振り返る大規模な個展を開催している現代美術家の塩田千春さん。生や死、不安、焦燥。心では感じ取れるのに、形として表れないもの、目に見えないものが塩田さんの作品には存在します。日常にある個人的体験が出発点であるにも関わらず、多くの人が共感し、引き込まれるのはそこに普遍的なテーマがあるからこそ。今回の展覧会で感じたこと、そして現在拠点とするベルリンでの生活や、東京との違いなど、さまざまな角度からお話をうかがいました。

**より深く追求した、過去最大級の個展で見えたもの。**

実は取材前に、森美術館で開催中の『塩田千春展：魂がふるえる』を少しのぞいてきたところなんです。本当に多くの方が来てくださっていて、私自身も驚きました。実際につくっている最中は誰もいないので、作品の傍らに人の存在があるのは、すごく不思議な気持ちでもありました。

展示室に入ってすぐに《不確かな旅》が展示されているのですが、足を踏み入れた瞬間にびっくりした表情をされた方がいて、その横で同じように驚いていた方がいたんです。次の瞬間、知らない人同士であるはずの、おふたりが顔を見合わせて相づちを打ちながら目で会話をしている姿を見て嬉しくなりました。



### 「塩田千春展：魂がふるえる」

新作を含むインスタレーションを中心に、立体作品、パフォーマンス映像、写真、ドローイング、舞台美術の関連資料などを加え、25年にわたる活動を網羅的に紹介した、塩田さん史上最大級の展覧会。鑑賞者に生きる意味や魂とは何かという根本的な問いを提示します。

2019年6月20日(木)～10月27日(日)まで、森美術館で開催。



### 《不確かな旅》2016/2019年

展示室いっぱいに張り巡らされた赤い糸と船が配されたインスタレーション。赤い糸は、全長280キロメートルほどになるという。塩田さんの作品によく登場するモチーフでもある舟は、過去の展覧会では本物の船が使われていたが、今回はより抽象化されたフレームのみの形となっている。

Courtesy: Blain|Southern, London/Berlin/New York

展示風景：「塩田千春展：魂がふるえる」森美術館（東京）2019年

撮影：Sunhi Mang

画像提供：森美術館

過去にも、いままでの作品をまとめたことはあるのですが、今回ほど自分と向き合った展示は初めてかもしれません。ひとつひとつの展覧会は、その時々で必死にやってきたのですが、こうしてまとめていただくと、過去と今がリンクしているんだなと再確認することができました。

たとえば、初期に赤い絵の具をかぶって自ら絵になったパフォーマンスや、赤い糸のインスタレーションがあるのですが、このころから"赤"だったな、と。当時はあまり考えていなかったけれど、今も赤は私の作品の中で大切な色。その色が最初から登場していることに、あらためてつながりを感じました。

また、土の中を裸で転がるパフォーマンスの記録が展示された後、泥のドレスがあって、泥をシャワーで洗い流すパフォーマンスへと、土を介して作品がつながっていく。ただ、バスルームで泥をかぶるビデオは、その時の苦しみが伝わってくる気がして、今、自分では見られないんです……。当時のベルリンの時代と状況があつた作品をつくっている。だから、どこか自分とは別物のようにも感じますし、今、同じ苦しみを持ったとしたら、まったく違う表現をするんだろうなと思います。

### **闘病から始まった展覧会。作品に思いを込めることで "私" を説明できた。**

そして、この展覧会は思わぬ状況から始まりました。チーフキュレーターの片岡真実さんからご連絡をいただいて、ベルリンでお会いしたんです。それが手術が予定されていた前日の夜だったのですが、その時にこの個展のお話をいただきました。「生きていてよかった。今までやってきて本当によかった」と、そう思った翌日、手術の後に医者さんからガンが再発したことを聞かされたのです。

最初は簡単な手術だと思っていたのですが、開腹してみると想像以上に転移していて、臓器を3つ摘出せねばならない状態だったんです。そんな大きな手術を終えて抗がん剤の投与が始まると、そこからはベルトコンベアに乗せられたように、どんどんと治療が流れていく。このベルトコンベアに乗れば、元気になれるのはわかっているけれど、感情や意識を持った "私" という部分が欠けてしまった。魂が置いてけぼりにされているような感覚が残りました。

こういった経験から、私は感情や意識に触れるような作品をつくりたい、何か形にしたい、より思うようになりました。また、病気がこの展覧会に影響を与えた部分も多々あります。命がなくなった後、感情や意識はどこへ行ってしまうのか。体は殻でしかないと考えるなら、殻の中の私はどこへ行くのか。そして、万が一の時、娘は母親なしでどうやって生きていくのか。そんな疑問や不安と向き合いながら、展覧会を構想していました。

塩田千春 アーティスト

CHI HARU SHIOTA / Artist



published\_2019.7.31 / photo\_yoshikuni nakagawa / text\_akiko miyaura

**人の心はもっとも解決が見つからないもの。だからクリエイティブになる。**

今回のメインビジュアルに書かれた「たましいってどこ？」という字は、私の12歳になる娘が書いたものなんです。まさにこの言葉のように、人の心って、いちばん解決が見つからないものだと思うんです。気持ちは移ろいやすいものですし、愛する故に憎んでしまったり、すごく複雑で、誰しものが抱えきれない葛藤を持って生きているのではないのでしょうか。

きっと、心がなければ、抗がん剤治療で魂が置いてけぼりになる感覚も、私という部分が欠けてしまう感覚もなかったのかもしれない。もっと受け入れやすく、簡単なものだったんだろうと思います。でも、現実には心はあって、それをどう説明していいのかわからないからこそ、表現へとつながるのだと思います。

この展覧会を通して、自分の中で"塩田千春"をより理解できた気がしています。今はオープンからだいぶ日にちも経ってきたので、私の仕事はそろそろ終わり。ここからは、来てくださった方たちの記憶の中で、作品が生きてくれたらいいなと願っています。

## 足りないものばかり。何かを埋める行為が作品をつくること。

療養中に感じた、自分が欠けてしまう感覚とはまた違うものですが、"足りていない"という思いは、私の中にずっとあります。自分には足りないものばかり——その満たされない何かを埋める行為が、私にとっては作品をつくることなんです。だから、私の作品はちょっとした欠けやズレから始まることがほとんどです。

ドイツに住んで3年ほど経った時、久しぶりに日本に帰ったら、いろんな違和感があったんです。昔の靴を履くと、サイズは変わらないのに、履き心地がしっくりこない感覚が残りました。昔の友だちと会っても何かが違う。人も物も風景も全部が違って、自分が3年の間に想像していた日本と、実際に見た日本との間にギャップがありました。その時の"なぜ"が作品につながるんです。

ただ、私の場合はすぐに形にするのではなく、自分の中で温めている期間があります。心で感じたことと向き合い、イメージを膨らませて、最後にやっと形にしていく。その間に新しいアイデアが浮かんでも、あえてスケッチなどはしません。絵にした時点で、絵という作品になってしまうので。そのかわりに、言葉だけを書き起こすことはあります。たとえば、焼けたピアノを置いた《静けさのなかで》は、最初に「私の本音には音がない」という言葉だけを書いて、そこからイメージを広げて形にした作品です。



### 《静けさのなかで》 2002/2019年

焼けたグランドピアノと焼けたイスが黒い糸に絡まって包まれたように展示されたインスタレーション。塩田さんが、幼少期に体験した隣家の夜中の火事の記憶から生まれた作品でもある。音の出ないピアノは沈黙を象徴しながらも、視覚的な音楽を奏でる。圧倒的なのに、まるで繊細な心を表すようだ。

制作協力：Alcantara S.p.A.

Courtesy: Kenji Taki Gallery, Nagoya/Tokyo

展示風景：「塩田千春展：魂がふるえる」森美術館（東京）2019年

撮影：Sunhi Mang

画像提供：森美術館

ただ、マテリアルを探す段階になると、イメージしていたものは壊れていきます。本当にこの材料でいいのかな、私のイメージしたものはこれなのかなと、迷いや疑問がたくさん生まれる。その時が、一番苦しいです。さらに"完成"と思えるまでには、長い時間を要することが多いです。

たとえば、《集積―目的地を求めて》も、最初は10個ほどのスーツケースを集めたけれど、全然足りなかった。さらに集めて、200個になった時に展示をしたのですが、それでも足りないと感じて、結局、最後は440個くらいになりました。各国で展覧会をしながら、「これでいいんだ」と感じるまで継続していくのが、私の作品づくり。『集積』もセリビア、イタリア、デンマーク、そして日本と循環するうちに形を変え、完成に近づいていきました。



#### 《集積―目的地を求めて》 2014/2019年

インタビュー中にも、「最終的に440個になった」と話す、スーツケースが会場の宙を舞う。塩田さんがベルリンの蚤の市で見つけたスーツケースのなかに、古い新聞を発見したことをきっかけに制作された。ゆらゆらと揺れ、スーツケースがぶつかり合って音を鳴らすさまは生物的で、見知らぬ人の記憶や旅が今もなお続いているような感覚に陥る。

Courtesy: Galerie Templon, Paris/Brussels

展示風景：「塩田千春展：魂がふるえる」森美術館（東京）2019年

撮影：木奥恵三

画像提供：森美術館

### 何もない、何にもならない自由な時間こそ大切。

そのクリエイティブの過程の中で、特に大切だと感じるのは自由な時間。ヨーロッパには"カフェ文化"がありますが、何をしているのかわからないような人たちが、昼間からカフェでお茶を飲んでいる姿をよく見かけます（笑）。

何もない、何にもならない時間、ただボーッと過ごす時間って、すごく大事。たとえば朝、仕事に行く前にカフェに立ち寄ると、最初は「あれしなきゃ」「これをやらないと」と頭に浮かんでくるけれど、それを越してもなおボーッとしていると、作品についてのアイデアや思いがいろいろと出てくるんです。むしろ、その時間にしか、生まれない何かがある。私の作品づくりにおいて、何もない自由な時間は必要不可欠なんです。

### 凄まじいエネルギーと吸引力を感じたベルリンの街。

現在はベルリンに住んでいますが、最初からこの地に住もうと決めていたわけではないんです。美大を卒業してすぐにギャラリーで個展をしたり、美術館で展覧会を開いたりすることはほぼ不可能。そこでもっと勉強しようと、留学を考え始めたんです。当時ドイツに受け入れ先があったこと、たまたま訪れたベルリンが魅力的だったことが住むきっかけになりました。

ドイツを東西に分けていたベルリンの壁が壊されたのが1989年。私がドイツに渡ったのはその数年後だったので、いたるところで改装工事が行われていて、アーティストたちがその現場にどんどんと入って行ってました。とにかく自由な空気が流れていて、当時は世界各地で展覧会やビエンナーレ、トリエンナーレをすれば、ベルリン在住のアーティストばかり。世界から集まったアーティストがアトリエを持ち、様々な国が混じり合い、主張しながら生きていて、凄まじいエネルギーと吸引力があったんです。



### ベルリンの壁

第二次世界大戦後、ドイツは東西に分断されたが、資本主義の西ドイツと、社会主義の東ドイツの間には経済的な格差があった。東から西へと亡命する人が続出し、それを阻止するために1961年、ベルリン市内につくられた壁。27年を経て1989年に崩壊し、翌年には東西ドイツが再統一。現在は文化財として、一部が保存されている。保存された箇所には、100人を超えるアーティストによる壁画が描かれている。

その空気に触れて、「絶対、ここに住みたい」と思いました。あらためて振り返ってみると、特別な時代だったのだと思います。人や文化がたくさん流れてきて、何かが生まれる空気がただよっていた。どこか、70年代のニューヨークのようでしたね。

今は、ベルリンもきれいになって雰囲気も変わりましたが、ドイツでありながらドイツらしくないという部分は変わらないです。ミュンヘンやフランクフルトなどに比べて、多国籍で住む人の顔つきが少し違うんです。だからか、私もベルリンにいる時は自分の国籍を忘れてしまうんです。

### 20代に体験した日本の現代美術を取り巻く厳しい環境。

そういう自由な場所だからこそ、生まれた作品がある。きっと、長く東京に住んでいたら、今の作品はつくれていないと思います。22、23歳のころ、個展を開きたくてリュックサックにポートフォリオを詰め込んで、銀座のギャラリーをまわったことがあるんです。もちろん、反応は厳しいものでした。まず、ギャラリーを1週間借りるのに50万円という大金がかかる。無理をしてやったところで来てくれる人は、友だちや美大の先生。それでは意味がないんです。

そもそも、貸し画廊という概念が海外にはありません。みんな展覧会をして、その売り上げだけでやっているのですが、日本のギャラリーはアーティストが家賃を払った上に、売上に対して画廊がマージンを取るシステム。学生や若手アーティストには、とてもハードルが高い。20年ほど前は、それが当たり前でした。特に現代美術に対する理解がまだまだ乏しく、「アーティスト」という職業が成立しない時代。最近ではアーティストと言えなくなると通じますけど、それでも生活を支えるという意味での「本当の職業は何ですか?」と、今も一度は聞かれます(笑)。

ドイツでもアーティストとして食べていくのは大変ですが、アートが身近にあるという点では、日本と環境が違うかもしれません。クリスマスプレゼントとして現代美術を買ったり、当たり前前に家に飾ってあったり。何より人々の中に、アーティストへのリスペクトがあります。





塩田千春 アーティスト

CHI HARU SHIOTA / Artist

published\_2019.7.31 / photo\_yoshikuni nakagawa / text\_akiko miyaura

**" どうでもいい " 物質的な豊かさより、大好きな絵を飾るよろこび。**

もちろん、以前に比べて東京も変わりました。少しずつアートが根つき、身近なものになりつつあるように感じます。ただ、滞在していると競争社会だなと感じる部分もあります。才能ではなく、物質的な競争——たとえば、どこに住んでいるとか、どれだけお金を持っているとか、子どもがどこの学校に通っているとか。死ぬ時に持っていけない" どうでもいいもの " が、東京にはうごめいている気がしてならないんです。それゆえに、がんばりすぎて体を壊したり、自分の気持ちを伝えられなかったりするのかなとも思います。

物質的な面で言えば、ベルリンは70年代かなと思うくらい地下鉄も古びていて、ファッションも気にしない人が多い。でも、生活するには十分なんです。それよりも大好きな絵を家に飾り、その絵を通じて会話ができること、心が通じるものが家にあることの方が重要なんです。

そもそも、教育が違うのも大きいかもしれません。日本は人と同じことを言うのがよしとされますが、ドイツでは違うことを言わなくちゃならない。でも、日本もこれから変わっていくと思います。それぞれが違った心を持って、違った意見を言って、ぶつかり合って、ひとつのものを形成していく。そのほうが、より人間らしくていいじゃないですか。

## アジアの一部であるけれど、日本は日本。

日本のアートを取りまく環境も、刻々と変化しています。たとえば、欧米の展覧会を日本が受け入れて、ステイタスを見せる時代ではなくなっている。『塩田千春展：魂がふるえる』も、釜山、ブリスベン、ジャカルタ、台北と巡回する予定ですが、日本から発信して、アジアをまわるような時代になったんだなとうれしく思います。

何より世界は今、アジアを見ています。エネルギーの強さと時間の速さ、人の動き方、考え方 ..... そのどれもが、他の地域とは違います。また昨今はアジアにコレクターが増え、新しい美術館がどんどんできています。主要なアーティストは『アート・バーゼル香港』に参加していますし、MoMA のコレクションのミーティングも香港で行われています。



### アート・バーゼル香港

1970年より、スイスのバーゼルで毎年開催されているアートフェア。その後、アメリカのマイアミ、香港でも開催されるように。『アート・バーゼル香港』は、大きな成長を続けるアジアのアートマーケットを象徴する存在でもある。第一線で活躍する世界のアーティストから、勢いのある新進気鋭のアーティストまでが集い、様々なジャンルの作品を展示する。画像は、2019年度、塩田さん作品《どこへ向かって》(2019年)展示風景。

展示風景：「Encounters」アート・バーゼル香港 2019

Courtesy : Galerie Templon, Paris/Brussels

撮影 : Sébastiano Pellion

一方では、日本がその勢いに押されている感じがあります。日本はよくも悪くもプライドがあって、アジア各国からリスペクトもされています。だから、アジア内に日本発の展覧会の受け入れ先はたくさんあるけれど、肝心の日本にはアジアの一部という認識がない。ひとつの国だけで成り立っている印象を受けるんです。私もドイツから帰ってくるまでは、日本はアジアの一部だと思っていましたが "日本は日本" だった。

## 国籍も性別も問わない、国境もない。現代美術は自由であってほしい。

なぜ、ここには国境があるんだろうと、とても不思議に感じるんです。本来、自由であるはずの現代美術の世界にも、国境やナショナリズムの意識がまだ残っているんです。

たとえば、グローバル化の展示会だと聞いて行くと、日本人の作家、アフリカ人の作家、アメリカの作家といったように、何カ国の作家を集めましたという表があって……それってナショナリズムですよ。また、私が『ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展』の日本館で展示した時、「日本の代表としていかがですか？」と質問をされたことにも違和感がありました。



### ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展 日本館

2015年開催の『第56回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展』で、日本館展示作家として塩田さんが選ばれた。2階の展示室と1階の野外ピロティを使った大規模なインスタレーション《掌の鍵》(2015年)を制作。空間を埋めつくす赤い糸の先に5万本もの鍵が吊り下げられた作品は大きな驚きを与えた。大切な人や空間を守る大事なものであり、扉を開けて未知の世界への行くきっかけをつくる鍵によって世界中の記憶が重なり、生きることを問いかけた。

展示風景：第56回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展 日本館(イタリア)2015年

撮影：Sunhi Mang

もちろん日本を否定するわけではないのですが、私は生け花や茶道と言った日本の文化を伝える作品をつくっているわけではなくて、国籍も性別も問わず、わかりあえるようなところにいるつもり。だから、そもそも日本の代表という考えがないんです。この先、そういった意識が、もっと取り払われた世界になればいいと思います。

## 今、興味があるのはアジアの若いパワーと彼らの吸収力。

だから、もし私がこの六本木で何か作品をつくるなら、日本と世界をつなぐような、より国境がなくなるようなことができたと思います。その一歩として、まずは六本木を伝えることをしたいですね。森美術館ひとつとっても、これだけ高い場所に大きな美術館があるのは私が知る限り世界の中で六本木だけです。「53階に美術館をつくろう」と構想して建てる時の、森さんの興奮を想像しただけで感動します。

今、世界の美術関係者が本当に興味を持っているのは、森美術館と直島なんです。直島にしても、どうして田舎の島にあれだけの美術作品があって、おじいさん、おばあさんが作品を説明できるのか、すごく不思議に感じるそうです。そういった部分を表面的ではなく、よりフラットに身近に伝えられたらいいですね。

私個人が、興味を持っているのはアジアでの展覧会。近々、ハノイと中国の美術館の方と打合せをするのですが、働いている人たちの多くが20代という若さなんです。まさに現代美術に興味を持ち出して、どんどん吸収しているところ。話していて本当におもしろいです、この先、そういった人たちと関わっていけると思うと楽しみで仕方がないんです。

## 取材を終えて .....

圧倒的な存在感を持ちながら、繊細で心の隙間にそっと忍び込んでくるような塩田さんの作品は、前から見た時と、ふと振り返って見た時では、まったく景色が違います。見えないものへの不安と、見えないからこそその希望が共存しているように思うのです。丁寧に、静かに、でも強い意志を感じるインタビューを終えた時、生きていてくださってありがとうございます、と心でつぶやかずにはいられませんでした。命と向き合いながらつくった展覧会。生きるこの意味をその身で感じた塩田さんが、次にどんな作品を手掛けられるのか、そっと待ちたいと思います。(text\_akiko miyaura)